

原始布・古代織に魅せられて

紙布、木皮、藍染：唯一無二の素材感 出羽の織座が受け継ぐ古の技法

おしゃれ工房



おしゃれ工房（大田区田園調布、

粕谷弘子代表、03・3722・0021）は、自生する草木から

手間暇かけて天然の繊維を糸に績み、織る呉服店である。他の織物にはない唯一無二の素材感を一人でも多くの方々に味わっていただくべく、2001年にオープンした。

江戸・明治時代に使われていた帳簿の一種である大福帳を切つてよりかけをした紙糸を横糸に、手引木綿糸を縦糸に織った紙布（しふ）や、楳の樹皮からつくった楳布（しなふ）などを使用して呉服や服飾雑貨を仕立てている。

梅雨時に根元から切り倒した楳の木の中皮を陰干しにし、8月頃木灰で3日程煮て柔らかくした皮を清流で洗い流し、その後2日程糠につけてさらし再び清流で洗い流し秋口まで陰干しにしておく。細く裂いた楳は長さが限られているので、楳績（しなうみ）という糸つなぎの工程を経て1月頃に績み終わった糸によりをかけて強くする。こうして編み上げた楳布は、北の地に原住民が住んでいた頃より生活上必要な衣類として用いられていた。

また、天然染料の藍は古より世

界中で愛されてきたが、昭和の高度経済成長期に化学と機械化の力に押され合成藍に変わってしまった。しかし江戸時代の藍染を目にした田中昭夫氏は最後に残るのは本物しかないと確信し、原点に還り型染から始めた。藍は生き物だから手入れは毎日。型染とはいえ、糊をおき何度も何度も浸けて藍の濃淡をつけ、特殊な布に型染を施す。田中氏は残念ながら本年2月に永眠された。藍染の美しさを極めた匠の技を受け継ぐ。

ぜひお立ち寄りいただき、出羽の織座が伝える一度は途絶えた古の技法、東北地方を中心に育まれた伝統文化に触れてください。



紙布の帯：写真の表面に黒く見えるシミは毛筆字



楳布の津軽こぎん刺バッグ



楳布と手引木綿の布を使った正藍型染の帯
正藍型染師田中昭夫 作